

東洋言語學の發展と近年の動向

高田時雄

はじめに

明治期以前の日本における外國語研究、とくに東洋語の研究といえ、ほとんどが中國語に關するものであったと言っても間違いではなからう。雨森芳洲の朝鮮語學、高橋景保の滿州語學、慈雲尊者の梵語學などは、そういった状況下における例外的なものとして特筆すべきではあるが、孤立して存在したもので、その學統が充分に受け繼がれ發展することはなかった。中國語にしたところで、古典文語を對象とするものであり、上代以來、漢字を使用して國語を書き記してきた我が國の傳統からすれば、果たして外國語學というような認識があったかどうかは極めて疑わしい。外國語としての中國語が取り上げられた例として、唐話の研究を擧げることが出来る。ただ、どちらかといえば趣味的に流れる傾向があり、今日から見て資料的價值がないわけではないが、これといった學問的成果があったとは考えられない。一方、韻鏡を初めとする韻圖の學や、古韻の研究、また助字の方面では、長い傳統と幅廣い學問的土壤に支えられつつ着實な研究が行われ、近代以降にも相當な影響を及ぼしている。

しかし日本において東洋語學の研究が確實な歩みを始めるのは、何と云っても鎖國體制を打破して、諸外國とのあいだに直接の關係が再開される明治以降である。時あたかも、すべての新しい學問とともに歐米から科學的な言語學が導入され、國語の研究や西洋の言語の研究と相まって近隣諸國の言語にも目が向けられるようになった。これは學問的興味の發露として自然な發展であり、次第に本格的な學術的研究が行われるようになる。また日本の政治的勢力が近隣諸國に擴大していくのに呼應して、生きた東洋諸語の研究が實際にも強く要請されるようになった。戦前期の實地調査に基づく言語研究の例として、金田一京助のアイヌ語、小倉進平の朝鮮語、淺井惠倫の台灣高山族言語などを擧げ得る。しかし中國語を中心とする東洋語研究の主流は、傳統を踏まえた文獻中心のものであったことは間違いない。國語音韻史から出發した有坂秀世の中國語音韻研究はまさにそういった流れの中に位置づけられる。

戦後五〇年間の日本における東洋諸語の研究は飛躍的な發展を遂げたということが出来よう。言語研究の安定した發展に缺くことのできない諸條件が、この時期に次々と充足されていった。アジア諸語を教授する大學や研究機關

が新たに設立され、各種助成金による現地調査も活発に行われるようになった。なによりも總體として研究者の数が非常に増加したことが、研究の質的・量的な発展を支えてきたといえる。三省堂が一九五一年に出版した『世界言語概説』の(東洋諸語をあつかう)下巻と、同じく同社が近年に刊行した『言語學大辭典』とを比較すれば、戦前戦後の相違は一目瞭然である。前者ではほんの一握りの東洋諸語が解説されているに過ぎないが、後者ではほとんど名前も知らないような言語が日本の研究者によって記述されているのを見ることが出来る。今日、日本における東洋諸語の研究水準が、全體として世界の第一線にあることは間違いない。

以上きわめて簡略に、今日までの日本における東洋諸語研究の経緯を見たわけであるが、以下の小文では、中國における諸言語を中心としつつ、東アジア諸語の研究の現段階と今後の展望とを概観してみたいと思う。ただし専門外の領域については、思わぬ誤解もあり得るほか、記述も繁簡さまざまにならざるを得ないと思われる。羊頭狗肉の誹りは免れがたいが、この點はあらかじめお許しをいただきたい。とくに朝鮮・チベット・東南アジアについては、別に項目が立てられているので、そちらで言及されることを期待しつつ、本稿ではほとんど觸れないつもりである。

中國語

現地調査と方言の記述

方言調査に関しては、民國時期すでに趙元任の指導下に中央研究院歴史語言研究所による調査が行われ、すでに幾つかの個別方言の報告が発表されていたが、まとまったものとしては湖北省方言調査報告が出版され、戦後も台湾に遷った同所から当時の調査資料に基づいて、雲南省、湖南省の報告が出された。人民共和國成立後には、普通話の普及のための基礎研究として、中國科學院語言研究所が中心となり、一九五六、七年に全國的な方言調査が實施された。その成果の一部は『方言與普通話集刊』『方言和普通話叢刊』といった刊行物や『中國語文』などの雑誌に發表されたが、全體的な報告が出されないままであった。原資料の中には文革の混亂期に紛失したものも多いという。また北京大學から『漢語方言字彙』『漢語方言詞彙』の二冊が六〇年代初期に相次いで出版され、非常に有用な工具書としての役割を果たした。文革の十年間は、他の多くの學術研究と同様に、この分野でも大きな空白であった。しかし文革が終わると、雑誌『方言』が一九七九年に創刊され、次いで八一年に漢語方言學會が組織され、方言の調査研究は新たな高潮を迎えることになる。『山西省方言志叢書』『山東方言志叢書』など、省ごとに方言を扱った各種叢書(最近さらに『湖南方言研究叢書』の刊行が開始された)が出版されるかと思えば、『山西方言調査研究報告』『閩語研究』『客贛方言調査報告』などの總合的報告書も陸續出版されるようになっている。また八〇

年代後半から刊行が始まった各地の地方志には、しばしば方言志が附載され、貴重な情報を提供してくれている。さらに九〇年代に入ると『現代漢語方言大詞典』が分冊で刊行され、最近全四〇冊がすべて出そろった。当初の計畫に據れば、これらの分冊を基礎として、総合的な大方言詞典が編纂されることになっているので、その完成を刮目して待ちたいと思う。一方で『現代漢語方言音庫』や『當代北京口語語料』などの大型音聲データも提供されるようになったことは喜ばしい。これらによって音聲記號のみの記述では隔靴搔痒の感がある言語事實も、より詳しい分析が可能になる。このように中國國內におけるめざましい方言研究の伸展は、わが國の中國語研究にも大きな影響を及ぼさずにはおれない。特に日中國交正常化によって中國への留學や共同研究が可能となったことで、特に若い世代の研究者が中國語方言の研究に志すケースが増えている。戦争とそれに續く相當長期の間、日本の研究者による中國本土における言語調査の道は閉ざされていたことを思えば、現在の良好な状況は今後とも有効に利用していく必要がある。

ところで中國において多數出版される方言調査報告は、ほぼ同じ調査マニュアルによって同じ方法で行われるために、悪くいえば千篇一律の感を否めない。今後はさまざまな方法的模索が必要であろう。その意味ではかつてグローターズ神父によって開拓された方言地理學的アプローチなどは、もっと試みられてよいものであろう。言語地圖として『中國言語地圖集』が一九八×年に刊行されたが、先進諸國に比較するとまだまだ物足りないものである。

歴史的研究

漢語史すなわち中國語史の研究は、これまでの中國語研究の核心部分を構成してきたと言ってもよい。中國のように書記の傳統が長く、極めて豊富な文獻資料を有する言語であってみれば、歴史的な研究に相應の力點がかけられるのは不當ではない。また傳統的な舊學の成果も利用できるという意味で、この分野は相變わらず活況を呈しているように見受けられるし、近代以降新たな分野が續々と開拓され、研究の範圍も格段に廣くなってきている。

まず音韻史では、清末の今音學の成果を踏まえて發展してきた中古音系の研究が、敦煌本など切韻系韻書諸本の系統的研究、および反切の整理と分析を踏まえて、今日ではきわめて精緻な段階に到達している。中國語における近代的音韻研究の創始者カールグレンの業績は、いまでも一定の參考價值があるとはいえ、もはや過去のものとなった。數十年前には上古音と中古音、さらに中原音韻に代表される近世音といった風に、中國音韻史が點をつなぐかたちでしか把握されていなかったのが、それぞれの中間時期についてもさまざまな資料が研究され、音韻變化の諸段階が埋められるようになりつつある。宋元時期の韻書や韻圖、とくに明清時期の資料が數多く利用され始めており、やがて詳細な音韻史が描かれることになるであろう。しかしこれらの資料は、

その構成が多分に因習的であったり、必ずしも記述的ではなかったりするなど、多くの問題点を含んでいる。かつて切韻音系の基礎が論じられたのと同様に、個々の資料についても慎重な考察が不可欠である。上古音と中古音を結ぶ時期については、資料として韻文の押韻が主たるもので、ほかには佛典中の音譯語をはじめとする零細な對音資料が存在するだけである。前者については、民國期すでに于安瀾の『漢魏六朝韻譜』があった。羅常培・周祖謨の共著『漢魏晉南北朝韻部演變研究』の第一分冊（兩漢部分）は解放後の一九五八年に出版されたままで、後續の分冊は長く未刊であったが、近年、周祖謨著『魏晉南北朝韻部之演變』という書名で台灣から刊行された。わが國では佛教研究者の層が厚く、サンスクリットなどインド諸語の知識を利用した對音研究において大きな貢獻をしてきたが、今後も得意分野として發展することが望まれる。

いわゆる白話語法の研究は、フランスのマスベロが先鞭をつけたものであるが、わが國でも戰前期から熱心に研究され、世界でも先端的な地位を保持してきた分野である。古い漢學においては考究の對象とならなかった元曲や白話小説が取り上げられ、さらに敦煌變文などの新發見資料も、いち早く取り上げられた。そもそもマスベロが最初に着目した白話資料は禪の語録であったが、より古い『祖堂集』を發見し、これを活用し始めたのは日本の學界であった。白話研究の分野における、入矢義高や太田辰夫の功績は大きい。とくに後者の『中國語白話文法』（一九五八）は先驅的な業績であった。中國でも戰中から呂叔湘がこの方面の研究を進め、解放後は多くの後繼者に恵まれたため、今日非常に盛んな分野となっている。基礎資料集として『近代漢語語法資料彙編』（唐五代卷・宋代卷・元代明代卷の三冊）も出版された。その研究領域は語法に止まらず、語彙の研究に及び、多數の辭書が刊行されていることは衆知の所である。それらは個別の著作についての辭典から、『近代漢語詞典』のように通時的な辭典、さらに『宋元語言詞典』『唐五代語言詞典』『宋語言詞典』『元語言詞典』などの時代を限った辭典など、その種類は枚舉に暇がないほどである。こういった面では日本の學界はとうてい太刀打ちが出来ない。

元代白話碑や『元典章』、さらに『孝經直解』などに見られる、いわゆる蒙文直譯體の語法は、言語接觸の恰好の材料であり、國際的にも注目を集めている。今後は清朝旗人の言語についても同様な面からの考察が待たれる。これはいわゆる北京語との關わりについても問題点を孕んでいるはずである。また漢譯佛典の譯語についても、しばしば特異な語法が觀察されることから、佛教混成漢語（Buddhist Hybrid Chinese）という用語が提唱されるなど、さまざまな新しい研究の動きが見られる。あわせて今後の展開に期待したい。一體に近代以前の中國では、口語の研究がおろそかにされてきたことは否定しがたい。歐米の言語學が導入されると、一種、反動のようにして白話の研究が盛んになった。中國語史は口語の變遷を跡づけるものでなくてはならな

いと考えることは、それ自身として間違いではなく、そのための資料として白話文獻が開拓されることはたいへん結構なことである。しかし漢字という特異な書記體系をもつ中國語のような言語では、文語とその生態を歴史的に跡づける作業もまた必要なはずであるが、この分野はまだほとんど全く開拓されておらず、今後の展開に待つところが大きい。

近年とくにわが國において盛んになってきた分野に、近代語彙史がある。明末イエズス會士の渡來以後、中國は本格的に近代西洋文明と接觸するようになる。とくに十九世紀以降の西學東漸は、中國語に巨大な影響を及ぼした。語彙についていえば、今日の學術用語の多くが何らかのかたちで西洋語を起源として生み出されることになった。それらはやや遅れて開國しながら、中國に先んじて近代化を成し遂げた日本との間に、複雑な語彙交流の歴史を形作っている。したがって、この分野は單に中國語學のみならず國語學とも深い関連性をもち、兩國にかかわる文獻資料の精査によって始めて十全な成果が期待できるわけで、今後わが國における研究の一層の伸展とともに、日中間の協力が期待される。

文字學は一般的には言語研究の邊境とされるが、こと中國に關してはきわめて重要な分野である。說文學を中心として組織されてきた傳統的古文字學は、清末から今日に至るほぼ一世紀のあいだに、非常な發展を見た。もとより甲骨文の發見がその大きな因子となっている。わが國でも古文字の研究は一貫して活發に行われてきており、その貢獻は少なくない。しかし近年中國で『甲骨文字合集』や『殷周金文集成』をはじめとする基礎資料集が出版されるなど、研究環境が整備されるに及んで、古文字學は新たな轉換點に立っているというべきであろう。文字だけでなく語法の研究も盛んに行われるようになってきており、これまでほとんど音韻面でしか議論されることのなかった上古漢語の具體相もやがて明らかになっていくことと思われる。また甲骨以前の漢字の起源に關しても、土器文の分布が考古學や民族學の知見に基づいて議論されるようになってきている。漢字がはたして西アジアの文字と無關係に發展したのかどうかという刺激的なテーマは、まだ検討の一步を踏み出したばかりとはいえ、今後さまざまな角度から議論がなされるであろう。

文字研究の主流はこれまで古文字であった。しかし石刻資料や、敦煌寫本をはじめとする古寫本、さらに戲曲小説など俗文學版本を利用した俗字研究が始まりつつある。字樣書などに正俗字體の規範が規定されているが、はたして中近世の實際の文字使用の現場でそれがどのような様相を呈していたのかは、民間における識字状況と關わる興味深いテーマであるが、ほぼすべて今後の調査にゆだねられている。石刻資料は近年中國で大きな叢書として陸續刊行されており、新出の墓誌も省ごとに刊行が開始された。また石刻の整理はいま國際的に大きな盛り上がりを見せているから、近い將來これらを組織的に用いた異體字研究が出現することを期待したい。『隨函錄』など各種の佛典音義も豊富な資料を提供してくれるが、この方面はわが國の研究者が比

較的成果を挙げやすい分野ではなからうか。

中國語の系統論については、十九世紀に、今日から見れば荒唐無稽とも思えるような、さまざまな説が提出されたことは衆知のとおりである。二十世紀に入ってからはさすがにこの種の議論は少なくなったが、近年でも南島語との関係が取りざたされたりもした。中國の學界では漢藏語説が一般に受け入れられているようであるが、印歐語と同一レベルでの證明がなされたものとはとうてい言い難い。そこに橋本萬太郎『言語類型地理論』に説かれるような議論の成立する餘地があるわけである。中國大陸における言語史の初期の様相は、單に言語學だけの問題ではなく、他の隣接諸科學の協同によってはじめて明らかにされるものであろう。今後の學際的な共同研究に期待したい。

新資料の發見と發掘

新資料の發見が研究の伸展に大きく貢獻することは當然である。二十世紀には敦煌寫本や甲骨文字をはじめとする各種資料が發見紹介されたために、新しい研究分野が開拓され、中國語史の領域が格段に廣くなった。近年、中國各地で帛書や簡牘など、書寫材料として紙が用いられる以前の文獻の發見が相次いで報告されるようになり、活潑な研究が始まっている。とりわけ長沙走馬樓の古井戸から三國時代吳國の簡牘が大量に發見されたというニュースはわれわれをして驚倒せしめるものであった。一説に總數十數萬點ともいわれるこれらの資料は、單に歴史資料としてのみ扱われてはならない。言語史を同時代資料に基づいて研究できるケースというのは、一般には非常に限られており、多くの場合は傳世の文獻に據るしかないのである。その意味でこの大量の簡牘の發見は、同時代資料によって全面的に吳國の言語史を構想できるたぐいまれな機會であり、言語資料としての取り扱いを重視すべきであらう。いずれにせよ早急な資料の公開が待たれるところである。個別的な發見についていえば、ごく最近韓國の大邱から元代の言語をうつした舊本『老乞大』が發見されたというニュースも傳わっている。これも二十世紀の最後を飾る發見の一つといえよう。

偶然による新資料の發見以外に、ある種の見通しをもって新たな資料を發掘していくという努力は常に必要であらう。近代以前の中國では、外國資料を用いた自國語の研究は皆無であった。民國以後、外國學者によって佛典音譯などが利用され始めたのをきっかけとして、しだいにこの方面にも眼が向けられるようになった。しかしまだまだ外國資料については、中國國內の學者よりも外國學者の貢獻が大きいように思われる。中國語史についていえば、梵漢資料、藏漢資料、さらにウイグル文、コータン文、パスパ文字などによる音寫材料はすでにこれまでも利用されて來たが、なお新しい資料を加える可能性は残されている。アラビア語やペルシャ語で書かれた文獻、例えばラ

シッドの『集史』や『タンスーク・ナーメ』などの書物は中國文獻を資料として用い、中國語を音寫しているために、文字體系による制約はあるが、充分、參考資料としての役を果たし得る。國內でも、回族によって用いられる、いわゆる「小兒錦」の文獻は今後もっと研究されて然るべきである。外國文字で音寫された材料のみならず、中國歴代の文獻中に散在する大量の外國語對音は今後何らかのかたちで総合的な調査整理が必要になると思われる。

わが國をはじめ、中國と古い交流のある近隣諸國には、長期にわたり漢字漢文を用いてきた経緯から、さまざまな資料が傳存している。これら日本資料、朝鮮資料、安南資料などは、國際的な共同研究の恰好の材料である。

やや遅い時代になると、明末以降のカトリック宣教師たちが残した大量の資料が存在する。これらは主としてヨーロッパの圖書館、古文書館に眠っており、研究者の發掘を待っている。これまでは『西儒耳目資』など印刷刊行された限られた資料しか利用されてこなかったが、今後は寫本として傳わる言語資料も取り扱う必要が出てくると思われる。またこれまではほとんどイエズス會資料しか眼中になかった感があるが、マニラに根據地を置いていたドミニコ會士やフランシスコ會士の残した資料も積極的に開拓していかねばならない。彼らは閩方言研究の開拓者であり、極めて早い時期すでにこの方言の辭書、文法を残しているのである。この方面は國語學というキリシタン語學に匹敵するような分野として發展させたいものである。ロバート・モリソンがマカオに着いたのは一八〇七年であるが、それ以後のプロテスタント各派宣教師や、外交官たちの編述した中國語學書は、すでに歴史的な研究價値を備えた存在になっている。今後はこういったヨーロッパ資料にも目配りが必要となろう。

中國語以外

北方諸語

中國の漢語圏に接して北側には、トゥングース諸語、モンゴル語、チュルク語諸方言などのいわゆるアルタイ系の諸言語が話されている。これらの言語は國境を越えてロシアやモンゴル、中央アジア諸國に広がっているので、記述的な研究はこれまでロシアの學者によるものが多數を占めていた。しかし近年では中國でもこれらの言語に對する調査が盛んに行われるようになった。中國では五〇年代に民族工作の一環として、すでに少数民族の言語調査が行われているが、八〇年代以降さらに詳しい調査が行われ、それに基づいた報告が續々と出版されている。限られた範圍であるとはいえ、日本の研究者にも現地調査の道が開かれるようになり、實際に幾つかの成果が現れ始めていることは心強い限りである。とくに甘肅や青海といった中國内陸部で行われる東郷語、保安語、東部裕固語、土族語（以上モンゴル系）や西部裕固語（チュルク系）などは、かつてロシア人による報告が一部存在したとはい

え、今後は中國學者の研究が主導的な役割を果たすに違いない。

さて北方諸語に關しては、これまで文獻による歴史的な研究が盛んに行われてきた。わが國について言えば、それらは言語學者よりもむしろ歴史學者によるものが多かったのは、これらの文獻が歴史的にも重要な存在だからである。まず滿州語についていえば、多くの場合、清朝史の史料として研究されることが多かった。世界各地に散在する滿文文獻の目録が、戦後、續々と刊行され、中國國內の全國連合目録も近年出版された。また中國では九〇年代に入って、大型の辭書が二種まで出版されるなど、研究環境は急速に完備しつつある。八〇年代以降の中國における滿語研究はとりわけ盛んで、新疆の錫伯語についての情報も増加している。一九八五年に創刊された『滿語研究』は順調に刊行が續けられている。滿文文獻の研究は、ヨーロッパでもドイツを中心に活發で、國際的な研究分野になっているが、その中であって日本の研究者の存在も大きいものがある。

敦煌やトルファンから發見された古寫本には、チュルク系に屬するウイグル語文獻が多數存在し、今世紀の初頭以來、世界中の學者によって詳細な研究がなされてきた。わが國は羽田亨以來、世界のウイグル文獻研究をリードしてきた経緯があり、今日でも言語學、歴史學、佛教學などをホームベースとする多くの研究者を擁している。この分野では、文獻を所藏するヨーロッパ諸國の學者との國際的協力による成果が目立って大きいことが特徴的である。また中國新發見の資料についても、中國人學者とのあいだで共同研究が行われるようになったことは喜ばしい。中國でもウイグル語を専門とする若い世代が何人が出現してきており、今後さらなる提携が望まれる。必ずしも北方言語とは稱し得ないが、西域發見の古代言語として、イラン系のソグド語やコータン語の存在を逸するわけには行かない。これらの言語の研究はかつてはヨーロッパ人の獨擅場であったが、現在では日本にも國際水準の研究者が現れ、大きな貢獻をするようになってきている。今後、こういった中央アジア古代語の傳統が日本にも根付いて行くことと思われる。西夏語研究は日本と深い因縁を持っている。ロシアのネフスキーや羅振玉父子などの日本滞在から數えれば、その傳統は非常に長いものがある。西田龍雄の優れた業績以後、研究者に乏しい憾みがあったが、近年若い世代の研究者が出現しはじめており、中國における西夏語研究の高まりと呼應して、新たな成果を期待したいところである。中國ではついに『夏漢字典』(李範文編著、一九九七)の大冊が出現した。ロシア所藏の西夏文獻目録も近く刊行される見込みであり、大英圖書館所藏の西夏文獻も目録の編纂が進んでいると聞く。さらに現在刊行が始まった『俄藏黑水城文獻』には漢文文獻のみならず、西夏文獻も収められる豫定であるから、研究環境は整いつつある。文獻の數量に比べて研究者の數が極端に少ない分野なので、今後の發展は十分に期待できる。

いわゆるアルタイ系の言語と日本語との關係は古くから論じられてきたが、系統論的な親縁關係はともかく、類型論的な比較によって日本語の特質を解

明しようという研究も行われつつあるので、新しい成果が期待し得るかも知れない。

南方言語

四川、雲南など中国西南部は、さまざまな系統に属する数多くの少数民族語が話されている地域であるが、欧米の研究者による、必ずしも組織的とはいえない報告が時になされる以外は、網羅的な研究はほとんどなかった。それが転換点を迎えるのは、皮肉にも日中戦争時期に、中国の學術機関がこの地域に疎開してきたことによる。すなわち一九三八年、中央研究院の歴史語言研究所と北京大學文科研究所があいついで昆明に移轉し、中国の研究者による本格的な民族言語研究が始まるのである。羅常培、李方桂、傅懋勳、張琨、馬學良といった人々の調査研究が精力的に行われた。李方桂は以前からタイ國や廣西省でタイ系言語の調査を行っていたが、他の人々にとってはまったく新しい研究対象であった。この時期の調査が解放後の中国における少数民族言語研究をリードして行く原動力となったのは間違いない。中国の分類にしたがうと、南中国には藏緬(チベット・ビルマ)語族、壯侗(チワン・トン)語族(中国國外でいうタイ及びカム・スイ語族にあたる)、苗瑤(ミャオ・ヤオ)語族、孟高綿(モン・クメール)語族に属する四〇種に近い言語が話されている。さらに下位の方言に至ってはその数はずっと大きいものになるであろう。これらの言語については、『中国少数民族語言簡志叢書』の各冊によってその概略を窺うことが出来るが、やや詳しい情報は『民族語文』雑誌や各種論文集など中国の出版物によるしかない。近年、日本の研究者による現地調査も可能になりつつあり、これら南方言語の研究に従事する若い研究者もまま現れるようになった。藏緬語族彝語支に属する彝語(ヨーロッパ人のいうロロ語)は独自の音節文字による文獻を保持し、同じく彝語支の納西語(モソ語)はプリミティブな象形文字を使うことで名高い。日本國內には資料が少ないために、今のところ研究者の数は限られているが、僅かながらも存在しているので、今後の發展に期待したい。

南方では類型の近い言語が多数存在し、互いに接觸する機會の多いことから、興味深い現象が多数觀察される。また非常に多くの民族が多かれ少なかれ複数の言語を使用しており、社會言語學的な研究對象としては非常に面白い地域である。中国でもこの地域の言語を素材とした言語接觸に関する報告や理論的研究が現れるようになった。雲南の白(ペー)語や、福建・浙江・廣東などに分散しているㄇ(シェ)語などは、漢語の影響が著しく、一種の混淆語とも考えられるが、この種の言語も、系統論的な枠組みでなく、新しい角度から見直す必要があるように思われる。言語接觸の研究はまた、中国大陸全域の言語史を構想しようとする場合にも、大きな理論的裏付けを提供するに違いない。今後の一層の開拓が望まれる分野である。

最後に、情報化と言語研究

近年の情報科学の進歩によって、言語研究の方法は大きく様変わりしつつある。とくに文献研究では、データベースの構築が抜群の効果を發揮することから、多くの研究者がコンピュータの効果的利用に取り組んでいる。しかし漢字文献では、異體字を含めた文字数の多さと、各国における漢字コードの相異が、全面的なコンピュータ利用を阻んでいることも否定できない。おそらく漢字については、ローマ字のような表音文字とは違って、完全には克服し得ない問題が将来的にも多少は残るであろうが、少なくとも各国の研究者のあいだで統一的な約束事が討議されることが望ましい。情報科学の研究者との共同研究によって、西夏文字など、漢字以外のアジアの古文字についても、フォントが提供され、コンピュータで利用できるような仕組みがしだいに開発されつつあるから、研究環境の改善は期待できる。しかし文献研究についていえば、その核心はやはり先ず寫本にせよ刊本にせよオリジナルのテキストを読み解く作業であり、古典的な方法を疎かにしてはならないであろう。電子図書館のような、居ながらにして古寫本の畫像を目の当たりにし得る便利な時代ではあるが、書寫材料の質感や筆勢など、畫像からは読みとれない情報もあることを認識しておくべきである。さらに図書館等においても、情報化の進展を理由に原資料の公開をあまりにも制限し過ぎることのないように要望したい。